

彙 報

チンゲルタイ先生の逝去を悼む
The Obituary of Professor Chingeltai

栗 林 均
(東北大学)

KURIBAYASHI Hitoshi
(Tohoku University)

2013年12月27日、20世紀の世界のモンゴル語研究の発展に指導的な役割を果たしたチンゲルタイ(清格爾泰)内蒙古大学教授が逝去された。享年90歳。

チンゲルタイ先生は、1924年内蒙古卓索図盟喀喇沁中旗(現在の赤峰市寧城県)の生まれ。1939-1940年に呼浩特蒙古学院に学び、1941年から日本に留学し、日本では、善隣高等商業学校、東京工業大学、東北帝国大学理学部に在籍し、1945年に帰国。1946年から赤峰の内蒙古自治学院でモンゴル語の教師をつとめ、1947年に齊齊哈爾に設立された内蒙古軍政大学で蒙古語文研究室の主任、1949年から烏蘭浩特の内蒙古日報社でモンゴル語の編集・出版の業務を担当した。1954年に中央民族学院の蒙古語言教研室主任、1957年1月に中国科学院少数民族語言研究所副研究員となり北京に居を移したが、同年10月には内蒙古大学の創設とともに設立された同大学の蒙古語言文学系の主任となり、呼浩特に活動の拠点を据えた。以後、蒙古語言文学系の語言教研室は、1962年に蒙古語文研究室となり、1982年には蒙古語文研究所に拡大組織されたが、チンゲルタイ先生はいずれもその組織運営の中心的な存在としてモンゴル語学の研究と教育の活動を推進した。その後蒙古語文研究所は1995年に蒙古学研究院に、さらに蒙古学学院へと発展して世界のモンゴル学の一大拠点となっている。先生は1984年に蒙古語文研究所の所長職を退かれた後もその指導力と組織力を發揮して教育研究活動を続けられた。1995年に蒙古学研究院の名誉院長の称号を得て、2006年にはすべての職を退かされていた。

先生は、研究所の活動のほかに、1973-1984年に内蒙古大学副学長、1975-1993年に第4、5、6、7期全国人民代表大会代表(うち第6、7期は常務委員会委員。第5、7期は民族委員会委員)、また中国民族語言学会副会長、中国蒙古語文学会副理事長、中国語言学会副会長、等々社会的に重要な職務を兼任された。

チンゲルタイ先生の学術論文集はこれまで3回出版されている。

1. 清格爾泰《xel bičig-ün tuχai ögülel-ün tegübüri 语言文字论集 A COLLECTION OF PAPERS ON LANGUAGE AND SCRIPT 1946-1996》(内蒙古大学出版社, 1997, 857頁)は、先生の教育・研究活動50周年を記念して出版されたもので、同時に出版された賈拉森・巴达玛敦德尔斯尔编《论文与纪念文集》(内蒙古大学出版社, 1997, 559頁)は先生と関係のあった40名以上の研究者によって寄稿された文章と論文集である。
2. 清格爾泰《民族研究文集》(民族出版社, 1998, 455頁)は、出版が予定より10年以上遅れたそうである

が、上掲書と重複しない論文が収録されている。

3. 《清格尔泰文集》(内蒙古科学技术出版社, 2010)は、全9巻の論文・著作集で、上の論文集に収録されている論文も含めて、公刊された数多くの論文・著書が収録されている。

これらには、チンゲルタイ先生の論著目録、研究紹介、略歴、年譜、自伝的回想文等が収録されていて、先生の研究活動の足跡を知るための貴重な資料となっている。

《清格尔泰文集》第9巻の「清格尔泰著作和文章目录」(531-546)には、「著作目录(包括合著)」として14編の著書が挙げられ、「论文目录及报刊上发表的部分文章」として151編の論文と文章のタイトルが収められており、これによって先生の多岐に及ぶ研究の業績を年代順にたどることができる。

チンゲルタイ先生の経歴は、《清格尔泰文集》第9巻に掲載されている「清格尔泰经历年表」(547-697頁)が最も詳しい(同書698-765頁はモンゴル語による同じ内容)。150頁に及ぶこの「経歴年表」は、先生が長年にわたってつけていた日記をもとに、《文集》を編纂する際に先生ご自身が抜粋して「取捨選択するように」と言われたものを、編集者が手を加えることなくそのまま収録したという。先生が教育研究活動を始められた1946年以降2009年まで、60年以上にわたって先生が体験された出来事と活動内容が年月日を追って詳細に記されている。先生の活動は、研究所、大学、内モンゴル、中国の研究活動と直結しているので、モンゴル語学に関わるそれらの動向を辿る上で極めて貴重な資料となっている。先生の「経歴年表」には、モンゴル語研究に関わる国内・国外の主要な学術会議、言語調査、編著書の編集・出版業務等々に加え、出席した行事、訪問者・会見者等、また出張先での宿泊地、訪問地、会食等についても、詳細に記録されている。人物については個人名が挙げられており、先生と親交のあった者は、その中に自分の名前を見出して、先生との思い出を新たにすること必定と思われる。とりわけ、先生は1980年(2週間)、1982-1983年(10カ月)、1987年(10日間)、1989年(1週間)、1999-2000年(1年間)に日本に滞在されているが、1982-1983年の訪問には約7頁、1999-2000年には約9頁が充てられて日本滞在期間中の幅広い活動と交流の跡を伺うことができる。

チンゲルタイ先生は、20世紀後半の中国におけるモンゴル学の基礎を築き、常にその中心にいて求心力を発揮するとともに、先頭に立って学界をリードしてこられた。第2次世界大戦後、中国にモンゴル語学が無かった状況から、50年の間に蒙古語文研究所という世界有数のモンゴル語学の研究拠点が成立するに至ったのは、ひとえにチンゲルタイ先生の活動に負っているといえる。

チンゲルタイ先生は、1947年齊齊哈爾^{チチハル}に建設された内蒙古軍政大学において、内モンゴルで最初の蒙古語文研究室の主任となり、17名のスタッフを集めて高等教育機関におけるモンゴル語の教育、各種教材の翻訳、モンゴル語の改革の検討を進めた。先生によれば、この時のメンバーがその後の内モンゴルおよび北京におけるモンゴル語の教育と研究の中核となった。1954年には北京の中央民族学院(現中央民族大学)に蒙語教研室が作られた際には主任となり、1955年と1956年に行われた全国少数民族言語調査で中国内のモンゴル語族と諸方言の言語調査を組織・指揮した。1957年に北京に少数民族語言研究所が設立されることになり、先生はその組織・運営にあたるよう招請され、一家で北京に移住した。研究所内に蒙古語族言語・満洲ツングース語族言語・朝鮮言語研究室が設けられ活動を開始した同年、内蒙古大学が創立され、大学の特色を担う蒙古語文学系が作られ、チン

ゲルタイ先生はその組織運営を託されて家族で呼和浩特に戻られた。内蒙古大学蒙古语言文学系の語言教研室は、1962年に蒙古語文研究室、1982年に蒙古語文研究所に拡大発展したが、先生は常にその組織運営の中心におられた。モンゴル語学の研究と教育のために優秀な人材を発掘して研究グループを組織し、大規模な言語調査・研究・出版の事業を遂行し、数々の卓越した成果を示して、世界をリードするモンゴル研究の中心に育て上げた。

先生が幾多のモンゴル語学の研究機関を組織・運営する事業を成功裏に遂行することができたのは、高い学識、温厚で人を引き付けるお人柄、学界の動向を見据える炯眼、組織的な事業を企画し実現する実行力、これらすべてを備えておられたことによるものである。

チンゲルタイ先生の研究はモンゴル語文法から始まった。1949年に内蒙古日報社から出版された《mongyol xelen-ü jüi(モンゴル語文法)》は、海外ではその英訳本A GRAMMAR OF THE MONGOL LANGUAGE Compiled by CHINGGALTAI(Hong Kong, 1951, 1952; New York 1963)がよく知られている。コンパクトであるが、音声・文字、語、文についてバランスよく構成され、説明の行き届いた便利な文法・学習書として利用された。翻訳本におけるモンゴル語の例文は、蒙文タイプライターで印字されており、出版史上でも類書は稀であろう。

チンゲルタイ先生の研究の特色は音声言語を重視していることである。「蒙古语巴林土语的语言和词法」(《内蒙古大学学报(社会科学)》1959年1期、モンゴル語版は1959年2期)は音声言語としてのパーリン方言の体系的記述であり、モンゴル語方言の記述的研究の手本となった。先生の長年にわたるモンゴル語の音声と文法の研究をまとめたのが、《odo üye-yin mongyol xelen-ü jüi(現代蒙語語法)》(内蒙古人民出版社、1979)および『蒙古语语法』(内蒙古人民出版社、1991)である。現代モンゴル語の口語と文語を合わせた文法書・教科書・概説書としてこれらの右に出るものはないと言うことができる。

チンゲルタイ先生は、モンゴル語の教育と研究の堅固な基礎を築くために大規模な編纂・出版事業を次々に推進された。第1の事業は、モンゴル語学の概説書である。蒙語教研室編《odo üye-yin mongyol xeie(現代蒙古語)》(内蒙古人民出版社、1964)は上巻(912頁)と下巻(616頁)からなる大冊で、大学の教科書として編纂されたモンゴル語学の包括的な概説書である。同書は、中国内で最も信頼できる文法書・概説書として定評があり、数十年にわたって大学の教科書・参考図書として使われてきた。2000年代になっても内蒙古大学のモンゴル語系大学院の入学試験準備に必須の参考書だったと聞く。

第2の事業は、モンゴル語の辞書の編纂である。『蒙汉词典』(1976、1999)は、1962年から蒙古語文研究室の主要事業として編纂が開始されたが、1966年以降文化大革命で中断、1972年に再開して1975年に試用本が刊行された後、1976年によく初版が出版された。これは、主見出し・副見出し(熟語)を合わせて5万項目以上を含み、規模においても質においても群を抜く現代モンゴル語の辞典となった。1999年には、主見出しに国際音声字母による発音を付して増補改訂した「増訂本」が出版され、研究・教育に不可欠の参考図書となっている。ちなみに、この原稿のモンゴル文字のローマ字転写は、『蒙汉词典 増訂本』(1999)の方式によっている。

第3の事業は、モンゴル語学の総合的なガイドブックの編纂である。『蒙古学百科全书 語言文字』(モンゴル語版2004、漢語版2010)は、モンゴル語研究に関連する術語、文献資料、研究書、雑誌、

研究者、機関団体、等々をつぶさに解説した百科事典で、モンゴル語の研究と教育にとってこの上なく有用な参考書となっている。チンゲルタイ先生は同書の巻頭に「蒙古语言文字及其研究」と題する導論を書かれている。モンゴル語版で53頁、漢語版で36頁に及ぶこの概説は、モンゴル語学の全体を俯瞰する最適の入門教科書とすることができる。

言語調査は、チンゲルタイ先生の研究の原点でもあり原動力でもあった。1955年と1956年に行われた全国少数民族言語調査では、甘肅省、青海省のモンゴル語、土族語、東郷語、保安語、ダグル語、バーリン方言、チャハル方言等々の調査を行い、その成果を「中国蒙古語族語言及其方言」(『蒙古語文』1957年11期-1958年12期)に公刊した。この調査によって、モンゴル系諸言語のいくつかは初めて本格的な言語調査が及び、内モンゴル・青海省・甘肅省のモンゴル語方言をも含めて中国内のモンゴル語諸方言の状況に光が当てられることとなった。先生の回想文(「我的主要经历」《清格尔泰文集》第9巻、520-528頁)によれば、先生が「モンゴル語の研究」を生涯の道として決められたのはこの時の言語調査の経験が契機になったという。先生はその後も、数次のモンゴル語方言の言語調査を組織・遂行され、信頼できる調査資料とそれにもとづいたモンゴル語研究を続けられた。

言語調査に基づいた中国内のモンゴル語の諸方言の特徴の概観は「中国蒙古語方言划分」(《民族語文》1979年1期、13-20頁、1979年2期108-112頁)としてまとめられている。《清格尔泰文集》第9巻の論文目録には「蒙古語族語言和蒙古語方言土語及其历史概述」のタイトルが見られる。これは《内蒙古自治区志 方言志》(方志出版社、2013)の導論であり、おそらく先生のモンゴル語方言調査の総括として位置付けられる概説となり、《内蒙古自治区志 方言志》の編纂・出版は第4の大事業とみなすことができる(筆者未見)。

言語調査として特筆すべきは、1980年に蒙古語文研究所のスタッフを動員して行われたモンゴル系諸言語・諸方言の調査である。ダグル語、土族語、東部ユグル語、東郷語、保安語、オイラート方言、バルガ・ブリヤート方言を対象にして、訓練された調査グループと現地インフォーマントとの共同生活を通して行われた調査はその規模と内容でモンゴル語研究史に残るものとなった。調査結果として、それぞれの言語・方言の語彙集、口語資料、研究書を3種類ずつ揃えて刊行された「蒙古語族語言方言研究丛书」(全21巻、2014年現在1巻だけ未刊)は、それぞれの言語・方言の研究を新たな段階へと導くものとなった。この調査で、先生ご自身は土族語を担当され、《土族語词汇》(1986)《土族語話語材料》(1988)《土族語和蒙古語》(1991)を公刊されている。「蒙古語族語言方言研究丛书」の編纂・出版は第5の大事業として位置付けることができる。

チンゲルタイ先生は、モンゴル語学で新しい分野を切り拓いてきただけでなく満洲語学、契丹文字の研究の分野でも学界に衝撃を与える発見と研究を行った。1961年に、先生をはじめとする内蒙古大学満洲語調査班が黒龍江省富裕県三家子村で言語調査を行い、消滅して既に久しいと言われてきた「満洲語」の話者が存在することを学界に知らしめ、話題をさらった。言語調査の成果は、「満洲語口語語音」(《内蒙古大学学报 紀念校庆25周年專刊》1982、23-73頁)として公刊されている。恩和巴圖著『満語口語研究』(内蒙古大学出版社、1995)は、チンゲルタイ先生のもとに保管されていた1961年の満洲語調査記録の資料に基づいてまとめられたものである。

契丹文字の研究では、未解読文字の解読という世界の言語研究における積年の課題の解決に向けて大きな扉を開くという快挙を成し遂げた。1975年から、チンゲルタイ先生が中心となって内蒙古

大学と中国社会科学院民族研究所の共同研究が開始され、1977年には「关于契丹小字研究」《内蒙古大学学报(契丹小字研究专号)》によって実証的な「契丹小字の解読」を提示する画期的な研究成果が公刊された。《契丹小字研究》(中国社会科学出版社、1985、799頁)は、共同研究の集大成として、契丹文字研究のゆるぎない基礎となった。契丹文字に関する先生のその後の研究は『契丹小字釋読問題』(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、2002、162+258頁)としてまとめられている。

チンゲルタイ先生は17歳で日本に留学して、東京工業大学と東北帝国大学の理学部に学んだ時は理系の学生であり、帰国後はモンゴル民族の教育と知的向上に貢献するために理科か数学の教師になりたいと思っていたと回想している。内蒙古軍政大学の蒙古語文研究室や内蒙古日報社でモンゴル語の翻訳や教科書の編集、出版の仕事を続けながらも、それを生涯の仕事にしようという決心には至っていなかったが、1955-56年の全国少数民族言語調査でモンゴル系諸言語・諸方言の調査を行ったことによってモンゴル語の教育・研究を一生の仕事にしようと決心したという。先生の適性と関心と大きな目的がモンゴル語学という大海で融合した瞬間であったと思われる。以後半世紀以上にわたってモンゴル語の教育と研究に専心された先生の事績は、まさにこの分野で「モンゴル民族の教育と知的向上」に大きな成果をもたらすものとなった。その成果は、モンゴル民族だけにとどまらず、モンゴル語学を学び研究する者すべてにとっても、限らない恩恵となっている。

モンゴル語学概説、モンゴル語辞書、モンゴル語学百科事典、モンゴル系諸言語資料・概説、モンゴル語諸方言概説等々、いずれもモンゴル語学の学習者、教育者、研究者に不可欠の参考図書であり、これらはすでにモンゴル語学研究の共通の基盤となっている。そうした数々の大事業は、どれを取ってみても、決して一人の力だけで成し遂げられるものではない。研究機関のリーダーとして、多くの優れたスタッフとともにそれらを企画し、自ら先頭に立って遂行し、成し遂げたところにチンゲルタイ先生の面目躍如たるものがある。

チンゲルタイ先生の深い学恩に感謝しつつ、謹んで先生のご冥福をお祈りする次第である。

〔付 記〕

前頁中段に言及した《内蒙古自治区志 方言志》(方志出版社、2013)に関して、内モンゴルの関係者に照会したところ、印刷の不備のため、出版社が修正して出版することになり、2015年2月現在も未刊とのことであった。一日も早い刊行を望みたい。